

オネエ所長の調査ファイル Ⅲ 33

山崎浩治

「ドラマの高橋一生を見てたら、心臓がドキドキしたの。これって恋なのかしら」

「それは更年期」

「悔しいけど反論できないわ。あたし、生理上がっちゃったもんなあ」

「ぬけぬけと言うな！ おっさんは生まれた時からずっと上がりっ放しだろ！ 大体、今日の女装は正気か？ もはや狂気のレベルに突入しているぞ！」

「年をとるとイタイおばさんになるのが怖いから、ファッションで冒険を避けがち。でも、あたしはいつまでも若くいたいから冒険してるのよ」

「何が `イタイおばさん、だ。女装してる時点で `イタイおっさん、なんだよ！」

「あら、江戸時代、女たちのファッションリーダーは歌舞伎の女形だったのよ。女形って言えば、あたしと同じ女装番長じゃない？」

「金沢プライベート・リサーチ」のオネエ所長、市山とツンデレ調査員の沙織が金沢市内の図書館で張り込みをしている。この日の市山はフリルのついたブラウスとレースのチュチュスカートで妖精をイメージした女装をしているが、どこから見ても「妖怪」だった。

金沢市の主婦・美代子(62歳)から「定年した夫にサラ金から督促状が届いた。女がいるに違いない。調べてほしい」と依頼を受け、夫の努(66歳)を尾行しているのだ。

努は40年以上勤めた会社を1年前に定年退職。夫婦の自宅はすでにローンを完済しており、2人の子どもは所帯を持っている。ぜいたくをしなければ年金で暮らしていける経済状態だったが、1カ月前、消費者金融から督促状が届き、努に総額100万円近い借金があることが判明。美代子が借金の理由をどれだけ尋ねても、努は頑として口をつぐんだままだった。

現役時代、仕事一筋で堅物の努に、これといった趣味はない。尾行したこの日も開館と同時に図書館に入り、閲覧席で雑誌に目を通していた。その様子を窺っている沙織が首を傾げた。

「ゴルフ用のポロシャツをスラックスにインして皮のベルトと履き古した皮靴。ヒゲは剃ってないし、七三分けの髪型は寝癖でボサボサ。こんなダッサダサな `昭和のお父さん、ファッションの人に浮気なんてできるのかしら」

◇ ◇

「ご主人の周辺に女の影は一切なかったわ。外出先と言えば図書館、喫茶店チェーンに病院。いつもひとりぼっちだし、同性の友人くらい作った方がいいわよ」

数日後、「金沢プライベート・リサーチ」で市山が報告すると、美代子が食ってかかった。

「そんなはずないわ！ ちゃんと調べてよ。絶対に女がいるから！」

「だけどご主人のスマホにも女の痕跡はないんでしょ？ あなたはどうして女がいると思うわけ？」

「それは……」しばし言いよどんだ美代子が決心したように口を開いた。

「夫の性欲が異常に強すぎるからよ」

「せ、性欲が異常って……」

意表を突かれた市山が思わず問い返す。美代子によると、夫婦の性生活は夫の働き盛りの時期と妻の更年期障害が重なって約20年前から途絶えていたが、定年と相前後して努が頻繁にセックスを求めてくるようになったのだという。

「私はもうそんな年じゃないから、もちろん拒んだわよ。すると夫は私に隠れて、いかがわしいネットを見るようになったの」

「アダルトサイトを見てるからって、浮気しているとは限らないでしょう」

「料金を未納するほど見るのは度が過ぎるわ。夫にこんなハガキが届いているのよ」

そう言って美代子を取り出したハガキには、こんな文面が記されていた。

「このたびはあなたが利用したアダルトコンテンツについて、運営業者より未納料金に関する債権譲渡を受け、私どもが回収業務を代行することになりました。速やかに入金して頂けない場合は、ただちに裁判を申し立てる予定です」

ハガキから目を上げた市山が美代子に尋ねた。

「ねえ、もしかしてご主人は架空請求の被害に遭っているんじゃない？」

◇ ◇

定年が楽しみだった。仕事だけの毎日から解放され、美代子と2人だけで過ごせる日々は新婚時代の再来だ。現役時代は仕事に追われてそれどころではなかったが、定年が近づくにつれて気持ちが高ぶり、性欲が復活した。これでも結婚した当初は週2～3回はこなしていたのだ。いままも時折、朝立ちはするし、喫茶店で見る週刊誌のヌードグラビアも楽しみの一つだ。男として枯れないために、セックスは何よりも若返りの妙薬だとシニアの健康雑誌に書かれていたことを思い出す。

とはいうものの、努には軽い糖尿病の持病があり、いつ男として「現役引退」するか分からない。そんな焦りもあり、定年したその夜、美代子の体を求めると、けんもほろろに拒絶された。美代子はセックスをすると痛みや出血があるのだという。翌日、図書館へ行って調べると性交痛にはホルモン補充療法や潤滑ゼリーが有効とあり、早速、美代子に伝えたところ、「私はセックスの道具じゃない！」と激怒した。

性欲はあるのに、妻が応じてくれない。しかし、レンタル店でアダルトDVDを借りるのは気恥ずかしく、風俗を利用する度胸もない。結局、その捌け口としてサラリーマン時代に使っていたパソコンでアダルトサイトを見るようになった。有料サイトではなく、無料で閲覧できる動画だ。好きなジャンルは「熟女」と「人妻」。孫娘とさほど年の変わらない女を性的対象として見るにはいささか抵抗があったからである。

それから折に触れて楽しんでいたが、ある日、アダルトサイトの料金未納を知らせる通知が届く。美代子がたまたま女友だちと泊まりがけで旅行に行っていたから良かったものの、もし見られていたらどんな騒ぎになっていただろう。慌ててハガキに記された番号に電話をかけ、出た相手に「有料サイトは見えない」と抗議したところ、若い男の小賢しい声が返ってきた。

「おじいちゃんさ、自分が見たアダルトサイトの名前、全部覚えてるの？ 無料サイトだと思っても、それ、有料だったんだよ」

どこかで間違っ有料サイトに入ってしまったのか。心当たりがないこともなかった。努の心に疑心暗鬼が広がっていく。電話の男が言い募った。

「利用料が長期にわたって延滞になっていて、延滞料も含めると35万円。このまま放置すると法的手段をとることになるよ。回収担当者がおじいちゃんの家にもで行くことになるけど、それでもいいの？」

「それは困る！」努の声が上ずった。

「だが財布の紐は女房が握っている。35万なんて、とても払えん」

「それならおじいちゃん、サラ金に行くと貸してくれるから」

その日のうちに男の指示に従ってサラ金のATMで金を借り、指定された口座に振り込む。ほっと胸をなで下ろしたのも束の間、「アダルトサイトの利用料が未納になっている」と別の男の声で携帯電話の留守録が入っていたのは、それから数週間後のことだった。

◇ ◇

「法務省認可の業者だと名乗ったくせに振込先は地方銀行の個人名の口座。わしだって普通の精神状態だったら『おかしい』と気付いたはずだが、妻や子どもに知られちゃいかん、一刻も早く解決したいと思って相手の口車に乗ってしまったんだよ」

「金沢プライベート・リサーチ」にやってきた努が苦渋の表情で吐露した。市山が美代子に頼んで努だけを呼び出したのである。市山が言った。

「架空請求のほとんどがアダルトサイトか出会い系サイト。振り込め詐欺などの特殊詐欺は誰かに相談することで防げるけど、架空請求の場合はプライドや羞恥心が邪魔して周囲に相談しにくい。あなたは、そこにつけ込まれたのね」

「まさか、あれほど執拗に電話がかかってくるとは思わなかったよ」

「架空請求のハガキは大量発送のDMよ。成功率は高くないから、一度でもカモになった人間のところには何度でも魔手を伸ばしてくるの」

複数の業者から連絡を受けた努は、総額で100万円近い金を支払っていた。1回の請求金額が30万円前後とさほど高額でないところが架空請求ならではの手口だが、このまま回数を重ねていくと金額はさらにエスカレートしていった可能性もあった。

「女房や子どもたちから『いい年をして恥ずかしい』『年甲斐もなく』と散々叱られたよ。今回のことで晩節を汚してしまった……」

がっかりとうなだれた努を市山が励ます。

「別に汚したっていいじゃない？ あたしの晩節なんか汚しまくりよ」

そんな市山の声は耳に入らなかったらしく、努が放心したようにつぶやいた。

「女房がセックスを受け入れてくれたら、こんなことにはならなかったのに……」



その後、努は警察に被害届を提出するとともに、振り込んだ口座のある金融機関にも連絡したが、騙しとられた金を取り戻すことはできなかった。同時に消費者金融の借金を一括返済、携帯電話と固定電話の番号を変更すると、架空請求業者からの電話はぴたりと途絶えた。

「こんな通知がまた届いたのよ！」

それからしばらくして、「金沢プライベート・リサーチ」に血相を変えた美代子がやってきた。一枚のハガキを握りしめている。とある地方裁判所が努に対し、アダルトサイト利用料の支払いを命じる督促状だった。目を通した市山がため息を吐く。

「裁判所からの督促状や訴状は必ず、特別送達で送られてくる。でも、これは普通郵便。しかも、裁判所の電話番号が携帯電話の番号になってるわ。架空請求の連中ってほんと、ツッコミどころ満載の漫才師ね。こんなもの、ゴミ箱にポイよ」

眉を吊り上げた美代子が一息にまくし立てた。

「また騙されてはいけないから、子どもたちとも相談して、夫の携帯電話とパソコンにはフィルタリングをかけることにしたの！」

フィルタリングとは有害サイトをブロックする機能で、未成年の子どもが使う携帯電話にフィルタリングをかけている保護者も多い。市山が異議をはさんだ。

「それは少々やり過ぎじゃなくて？ ご主人は子どもじゃないのよ。サイトの利用規約をよく読んで、もし架空請求を受けたら無視する。相手が悪質な場合、警察に相談する。それを心掛ければ被害は防げるわ」

「今度のことで懲りた夫は、アダルトサイトは金輪際見ないと言っているの。もうおじいちゃんなんだから、そっちの方は卒業してもらわなきゃ」

にべなく言い切った美代子に、市山は返す言葉を失った。それから数カ月後、市山と沙織が様子を見に行くと、努は喫茶店チェーンの店内で週刊誌を読み耽っていた。開いているページはヌードグラビアである。離れた席から観察する沙織が嘆息した。

「まわりを気にしながらグラビアを眺める背中に哀愁が漂っているわね」

「60代なんてまだまだ現役なんだから、依頼人もアダルトサイトぐらい見せてあげればいいのに」

そう言った市山はこの日、ラメを配した浴衣をワンピース感覚で身にまとい、ポニーテールの髪留めにはシュシュを使っている。これから近所の盆踊り大会に顔を出すつもりなのだ。喫茶店を出て、日傘を差して歩く市山に、沙織が言った。

「おっさんの浴衣姿、意外と似合ってるな」

「うれしいわ、ほめてくれて」

「あとは髪型をちょんまげにして、`どすこい、と言えばパーフェクトだ」

「あたしは巡業中の関取じゃないってば！」